文献探査の手引

秋　谷　　治

はじめに

この一文は新しい知見や証明を述べようとするものではない.

黒沢明監督の映画『生きる』についてレポートを提出してもらうとする. なるべく簡便に済まそうと望む多くの輩はインターネットによってたちまちいくつかの情報を得て, 奇特な提供者が作成してくれた解説をそっくり頂戴して報告してくるのが目に見えている. だから同じような文章のレポートがたちまちいくつも手元に集ってくる. 何も自分で考えようとしない態度や提供者の名前さえあげずに知らぬ顔の半兵衛を決め込む恥知らずを咎めるのは後回しにして, そうした厚顔無恥を質す前に, どうやって必要な文献を探せばよいのか示しておかなければ, 厖大な情報の社会に漂い, 断片的な情報（知識ではない）ならば手軽に入手できる現代人に無いものねだりをすることになるであろう. 『生きる』をビデオテープやDVDで見ることは当然のこととして（本当は映画は映画館で観るべきだが), 文献はどうしたらよいか. OPAC（Online Public Access Catalog）であるヘルメスかNACIS（学術情報センターのオンライン）で本学や近隣の大学の所蔵図書を,「黒沢明」「日本映画」「生きる」等のキーワードで検索する位は現代の学生なら誰でも実行することであろう. 図書館で春秋開催される講習会にでよ. しかしこれでは所蔵されている場合と, 図書であることとキーワードの範囲（9割方検索可能とされるが）で検出できるものに限られてしまう. レポートの段階ならばこの検索で得られる図書を読む位でもよいだろう. しかし研究論文, 卒業論文の場合には不十分すぎる. せめて『事典　映画の図書』(辻　恭平編

凱風社，'89）か『映画・音楽・芸能の本全情報　45／94』（日外アソシエーツ——以下日外と略す，'97），『同　95／99』（同，'00）を見て検索するべきであり，後に記す書誌検索により文献目録を調べ，そこに載る雑誌や図書に当たるか国会図書館編雑誌記事索引によって掲載雑誌を見るという手続が必要である．或いは『日本映画文献史』（今村三四夫，鏡浦書房，'67）に拠り論文に当たるべきである．『キネマ旬報』誌などを知っている向きは図書館でバックナンバーを一冊一冊手繰って見る根気があれば上等である（最終的にはそうした努力が必要な場合も往々にしてある）．その努力は必然的に他の興味深い論文に陸続と巡り合えよう．そして何より黒沢明特集号の何冊かをも手にしえるだろう．

だが多くは唯一冊の本又は雑誌を図書館の書架や本屋の棚で見つけたところで検索努力を抛り出してしまい，その一冊を後生大事に，その一部を覗きみるだけですませるのがオチであり，少しまともな向きでも引用されている文献，あるいは運良く1～2頁の参考文献が掲載されていれば，それらを辿っていくことで若干の文献に触れていくという芋づる式の道筋で済ませてしまいがちである．我々研究者も芋づる式はよく使う手であるが，これは暗中模索に等しく，一筋のたよりないルートに縋って歩む危険な方法である．依り所の著者の知識や判断に頼りきってしまうために，その著者の視野においてしか対象を見ないことになり，切り捨てられた情報や未開拓・未見の情報を無視してしまうことになりかねない．それでもスウェーデンのアカデミーはドイツ人科学者が記してくれていた田中耕一氏の論文名によって田中氏を顕彰することに辿りついたらしいので，藁一本でも粗末にできないが．

一橋大学は中央図書館方式を取っており，大半の図書・雑誌他資料が西キャンパスの図書館に集中して納められている．蔵書数160万冊といわれ2000年竣工の新しい建物は小平分館に納められていた書籍まで全て呑みこんでいる．商法講習所から出発し社会科学中心に130年余りで展開してきたので，相関連する分野の書籍が集中して納められているため便利なようであるが，新しく学問世界に足を踏み入れた者にとっては大きすぎて，細分化された研究分野やささいな関心の研究文献を一望の下に見渡せず，必要な資料をすぐ手元に集めるのには不自由な一

面もある．ことに机の周囲の手の届く所に資料を置いておかねば気の済まない不精者には贅沢な悩みとなる．そのようなもの臭さな輩は抛っておけばよいが，問題なのは入学したてのういな若者（おそらくはそのまま3年間，4年間）に，一つの分野の最低限弁えるべき手段，文献が皆目つかめないことである．このことを逆の体験によって筆者は痛感している．本学を卒業して，国文学研究科の大学院に入学した際，その共同研究室を訪れ辞書・文献目録類はもとよりテキスト・研究書・雑誌に至る資料が一つのセットとして揃っているのを見て一驚し筆者のような不精者にはこんな便利なところはないと思うことしきりであった．だから本学に戻ることができた時，これからどうしたらよいかと不安になり，しばらくは先の研究室にすぐに駆けつけられる所に住居を定めた程である．そこでは基本的な調査は全て済ますことができ，この研究室では得られない資料，自分が発掘すべき資料を探すために他の図書館や所蔵先に足を運べば良いのであり，能率的であるばかりでなく，その先へ先へと進むことができるのに対し，本学では自分の分野の必要文献を把握するのにもがき，まず手間暇がかかって遅れてしまう．というより把握すらできない．

こうした悩みすら抱えることを知らない大多数の脳天気な学生に早く目覚めてほしいおせっかい屋として一文ものさざるをえなくなったのは，昨今のかまびすしい大学改革の余波による．上述の様な状況下におかれる後輩諸氏，年々増える留学生諸氏，専門外の分野に股がる研究や関心を持つ諸氏が，足の踏み所を得られず当惑している暇など許されなくなってきている現状を打開すべく，幾分でも参考になる手続きの文献を紹介したい．ここで紹介する文献は一般的には周知の資料で新たに発掘したものではないことをあらかじめお断りしておく．

1　文献目録

ある情報や知識を深めていくには，正確な分類ではないが，便宜上段階別に述べると，

第1段階

a. 百科事典やインターネットによる最初の概括的な情報（電子ジャーナルなど

の専門情報はいまは論の外におく）

b. 手当たり次第に入手した入門書による概観

aよりbが遥かに好ましいのはいうまでもない．aは小学生レベル．bは中高生レベルといいたいが，昨今の大学1年生レベルであろうか（我々もこのレベルから進み始めることはある）．

第2段階

a. OPACのヘルメスや学術情報センター情報による図書を知り，それを読む．

b. 1-bや，2-aの図書の巻末の参考文献欄や引用文献で知りえた図書を読む．

第3段階

a. 書庫・書架や書店（新刊，古書店）をよく眺め関連書籍をある程度把握している

b. 参考図書コーナーに思いあたり検索方法を弁えているレベル

第4段階

a. 国会図書館編雑誌記事索引，年鑑，ハンドブック他の利用方法を知っているレベル

b. 個別の文献目録の重要さを知っている，もしくは知る方法を知っているレベル

第5段階

a. 新刊案内等の新しい情報に絶えず目配りできているレベル

b. 4-bでも検索できない情報・資料を入手できるレベル

大まかに探査力レベルを仮に分類したもので精密なものではない．研究者も1のa，bから駆け上ることもあり，3-bを小学生位から知っているものもあろう．しかし恒常的に研究に携る者は，3-a，bは当然のことであり（読書が習慣づいている人々のレベル）第4段階から普段行動しているのに対し，研究調査の初心者や，日本の調査活動に不慣れな留学生，あるいは我々でも専門外のことを調べようとする場合には，この第4段階に手が出せないのであろう．3-bにあたる本学図書館の参考図書コーナーも数年前から随分よくなってきたと思われるが，

まだ個々の専門分野への橋渡しの機能を果たすには不十分であり（教官の認識・指導が不十分・無関心なことに帰因する），4-a，bに達するのにハードルがあるように思われる．

前置きが長くなってしまったが，このハードルを少しでも超えられるよう，いくつかの書籍を紹介したい．

1.『情報と文献の探索』（長沢雅男著，丸善刊　第3版，平6年）

辞書を手元に用意しておくように，この書を身辺に常備しておきたい．表題が地味なので注目されにくいが，この本を出発点として次次に見るべき参考図書を繰り寄せられる便利至極な基本的な文献である．「参考図書・データベース情報の探索」「言語・文字情報の探索」「事物・事象情報の探索」「歴史・日時情報の探索」「地理・地名情報の探索」「人物・団体情報の探索」「図書・叢書情報の探索」「新聞・雑誌情報の探索」と章立てし，それぞれ，探索の仕方を例示しながら，分野別の事典・文献目録・総覧・索引を解説しており，欧米のそうした文献類も豊富に掲げてある．先のレベルでいえば3-b，4-a，b，5-aにあたる主要文献を把握できる．冊子体の参考図書を基本に掲示してあるが，データベース，主なオンライン検索サービスにも触れている．つまりこの書は参考図書の辞典・索引というべき書であり，個々の文献へ達する参考図書を示してくれているのである．この書を繙いてただちに個々の文献を知るというわけにはいかないが，何をみれば個々の文献に達しうるかを導いてくれるのである．ほんのいくつかを例示すれば，Introduction to Reference Work という米国の参考図書文献，『社会科学大事典』，『事典　現代のフランス』，『人物文献索引』，World of Learning，『専門情報機関総覧』，Books in Print，『仏書解説大辞典』，『東洋学文献類目』，『法学文献総目録』，『経済史文献解題』，『翻訳書総目録』，『全集・叢書細目総覧』，Library of Congress Catalog・Books，『国書総目録』，Standard Periodical Directory，New York Times Index，『日本雑誌目次要覧』，American Humanities Index，『法律判例文献情報』，『経済学文献季報』，『教育索引』，『社会科学論文総覧』，Poole's Index to Periodical Literature，Information Science Abstracts．等をたちどころに知ることができる．

この本に類するものとして，『チャート式情報・文献アクセスガイド』（大串夏身　青弓社　1992），『情報探索ガイドブック：情報と文献の森の道案内』（情報探索ガイドブック編集委員会（編），勁草書房，1995）がある．前者にはCD-ROM，オンラインデータベース名索引がついており，後者は細かく入手法を案内し，入手困難なものにも触れている．

この他欧米におけるより具体的なものにGuide to Reference Books（アメリカ図書館協議会　11版，Chicago '96——Sheehyと略称される），Guide to Reference Material（英図書館協議会　London '00——Walfordと略称される）という米国，英国・ヨーロッパ中心のものがあり，日本でも『日本の参考図書　解説総覧』（日本図書館協会　1980）及び同四季版，『現代の図書館』誌連載「最近の参考図書」によれば具体的な参考図書名を知りえよう．

この『情報と文献の探索』に惜しむらくは載っていないが，増田四郎・馬場啓之助・都留重人・小泉明編『経済学ガイドブック』（東洋経済新報社　昭46）をあげておくのは我田引水すぎるが『一橋論叢』ということでお許しいただきたい．四人とも学長経験者であり，現学長も若き日の執筆者の一人であるように当時の本学の総力（？）をあげた書である．門外漢が紹介するのも気がひけるが，細分化された分野・テーマ別に解説・基本文献解題に参考文献目録を付し，研究書だけでなく研究誌にも外国誌を紹介してある．巻末には内外の辞典・雑誌一覧がある．30年も前のガイドブックであるが，今も有効なのではないだろうか．

閑話休題，もう少し直接的に必要な文献目録名を知ることができないだろうか，という筆者のようなものぐさ向きの，ないしは先のレベル4-bにあたる専門的，個別的な対処法を考えた先人がいた．天野敬太郎氏は『本邦書誌ノ書誌』（昭8）を手始めに索引の大系化に大きな足跡を残し，すぐれた索引業績に贈られる「物集(もづめ)高見賞」特別賞を授与された書誌学者である．氏が纏めたものとその後継書として

2. a 『日本書誌の書誌』総載編・主題編1（巌南堂版，'73・81）及び累積増補版の日外アソシエーツ刊版，人物編1・主題編2（'84）

   b 『主題書誌索引』（日外，'81）

c 『主題書誌索引』81～91（日外，'94）

d 『人物書誌索引』（日外，'79）

e 『人物書誌索引』81～91（日外，'94）

を特筆してお薦めしたい．aには2種4巻あり，巌南堂は今も神保町にある古書店で，在庫が若干ある由．

日外アソシエーツは1965年開業のデータベースカンパニーとして，各種の検索文献刊行・オンラインサービスを行なう出版社で，ここの『日外アソシエーツ総合出版目録』を備えておくとよい．この章で1，2と紹介してきたが同じレベルで3と番号を付しても過誤にはならない文献目録である．様々な分野の参考図書を刊行しており，ごく一部例示すると『学会年報・研究報告論文総覧』，『アジア・アフリカ関係図書目録』，『経営管理研究文献要覧』，『国立国会図書館所蔵主題別図書目録』，『個人全集・内容綜覧』，『女性・婦人問題の本全情報』，『日本語の本全情報』，『中国文学研究文献要覧』，『伝記・評伝全情報』，『文化人類学研究文献要覧』，『ビジネス誌記事索引』，『Joint 累積版　年刊雑誌記事索引　'84経営・労働索引』他多数の文献目録を刊行していることが一覧できる．筆者の手元にも『日本文学研究文献要覧』の一部や『日本美術作品レファレンス事典　絵画篇』，『画集・写真集全情報』，『「明治」を知る本（読書案内）』，『ものの歴史を知る本Ⅰ・Ⅱ』などがあり重宝している．ただし杜撰なところが目につき，専門家の目を経ていない電子化作業の欠点には十分留意しなければならない．これらのうち図書館参考書コーナーにも若干は揃えられている（ケンブリッジ大学図書館参考書コーナーにも一部揃えられていた）．a-eの紹介の前に脱線したが，ここの目録が役に立つことを述べた．

さてa・b・cの『主題書誌索引』（以下，a・b・cの書名を一括してこう呼ぶ）について，例えば「推理小説」の文献目録を知りたい場合，この項目を引くと，『世界の推理小説総解説』（自由国民社刊，'82）の書名や「推理小説雑誌細目総覧1　昭和20年代篇」（推理小説研究資料叢書1　自由国民社）というマニアックな文献目録や『日本推理小説辞典』（東京堂，'85）等の辞典の他，ある書籍・雑誌の巻末に文献目録が付されたものまで拾うことができる．「数学」を引

けば，『数学雑誌綜合目録』（'81）という私家版？から『情報科学のための数学入門』（東京書籍，'91）・『数学へのアプローチ』（学術図書出版社，'91）等の巻末文献目録や「1990年度修士及び博士論文」（『数学』誌　岩波書店，'91）他多数の参考文献目録を知りうる．五十音引きで百科事典を引くように調べればよい[1]．

a・d・e『人物書誌索引』（同上）も同様で内外の人物名で調べられる．タゴールというインドのノーベル文学賞受賞の著名な詩人に関しては，謄写版（何のことか知っているだろうか．ガリ版もしくは，「プリントごっこ」という商品は？）『タゴール文献目録』（東大図書館刊　昭32）や『日本現代文学全集』第15巻（講談社　昭44）巻末に文献目録があることを知れる．『一橋論叢』退官教官記念号に業績目録が付されるが，これも教官名で引くことができる．三島由紀夫の様な著名人になると1頁分もの文献目録名が載り，どれに依れば最も詳しい目録が得られるのか困るほどであるが，主要なものには二重丸印が付され便宜が図られている．因みに私見では一冊本の『三島由紀夫全文献目録』（夏目書房 '00）が三島自身の著作を含めて詳細である．

以上のように，ことがらや人物に関しては百科事典を引く手軽さで必要な文献目録名を知ることができる．92年以降の12年分についての巻が鶴首される．この『主題書誌索引』『人物書誌索引』に関しては『情報と文献の探索』で代表例として紹介されている．この書の有効性が理解されよう．人物文献目録についてはこの他にも，『日本人物文献目録』（法政大学文学部史学研究室編　平凡社刊，'74）――約3万人の日本人に関し，明治初年から1966年までに刊行された図書・記事の文献，雑誌特集号を掲示してある．（筆者も大学院修了時に購入したが，）すでに30年近く経てしまい，この間を埋めるには，上述d・e及び『人物文献目録』（日外刊隔年版）によるしかない．信用度の高いものに国会図書館参考書誌部編『人物文献索引』（同館，67―72）「人文篇」（1945年から64年迄に刊行の文献）・「経済・社会篇」（明治以降1968年迄）・「法律・政治篇」（明治以降1971年迄）があり外国人も対象になっているが，この後については上記書に頼るしかない．以上は人物の文献目録もしくは著作目録，人物関係文献のあるものに限られるが，

一般的に文献を知る対象としては十分すぎるであろう．こうした人物以外の人物については各種人物事典や『人事興信録』・『日本紳士録』やそれらを総載した『人物レファレンス事典』，『西洋人物レファレンス事典』，『東洋人物レファレンス事典』（いずれも日外，83—84）がある．アメリカでも Biography and Genealogy Master Index（Detroit, Gale 刊，'80）がある．これらについても『情報と文献の探索』でより詳細な調べ方を知ることができる．それ以外というとレベル分けした5-bになり，無名，未紹介の人物の探索になってしまうであろう．尚，本学図書館が数年前に人物を調べるためのリーフレットを発行しているのを特筆しておきたい．よくできていると思われるので，他の分野へも拡大して下さることを図書館に期待したい．

3.『雑誌記事索引』

国会図書館逐次刊行物部編の季刊誌でインターネットでも1984年以降のものは検索できる．1948年から「人文科学編」（のち「人文・社会編」として）が刊行され，学術雑誌を件名・著書名で引ける．しかし学術誌中心なので，冒頭の「生きる」は検出が難しい．『主題書誌索引』により黒沢明文献目録が検出できればよいが，映画雑誌などの商業誌は『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』によって調べるのも一法である．大宅壮一ノンフィクション賞に名を残す社会評論家の所蔵書を元に明治以降の大衆誌・週刊誌の主要なものを所蔵している民間の図書館で，利用者は不勉強な一般人・学生よりも圧倒的にマスコミ関係者というユニークな施設である．この所蔵誌の内2000誌の記事を件名・人名別に引ける目録として名高い．この二つの索引は覚えておいて欲しい．本学の学生には他に『経済学文献季報』（紀伊国屋書店，'92～）・『雑誌記事索引　経済編／産業・企業編』（日外，'79～）が有用であろう．ともにやはり『情報と文献の探索』を参照されたい．法学については『法律判例文献情報』（第一法規，'81～）や最高裁判所図書館編の『邦文法律雑誌記事索引』（同館，'58～）がある．アメリカにも Readers' guide to Periodical Literature という一般誌200誌の記事索引がある他，Humanities　Index という英米の文学関係・人文科学系の評論誌・専門誌の索引もある．これらについては『情報と文献の探索』や『世界 CD-ROM 総覧』（紀伊

国屋書店）・『データーベース台帳総覧』（通産省編，データーベース振興センター）を見てほしい．先のレベルでいえば4-b，5-aのレベルにあたり，本稿の目的ではないので逐一紹介することは免除させていただく[2]．卒業論文作成に上述国内の文献を見る方の出現を期待したい．

2 研究方法と外国文献

長沢雅男氏・天野敬太郎氏の地味な懇切丁寧な努力の有り難さ尊さを知るには，ともかくも一度利用してみることである[3]．学問に王道はないのであるから，回り道と思えても，徒手空拳のまま霧の中で何里（『単位の事典』（柏書房）参照）もの間おろおろしていてもしかたがないのであり，自動ドアの様に向うから開いてくれるのを待つのは棚ぼたの僥倖を待つ空しいことであり，母親にも何も期待できないのである．手元においておける本は限られるが（『主題書誌索引』は買いきれない），『情報と文献の探索』は安いものであり，日外アソシエーツの目録はただである．これらに加えて一般的な情報入手の手引として若干の書物を紹介したい．もちろん図書館参考コーナーの利用についてはいうまでもない．

1. 『人間科学研究法ハンドブック』（高橋順一他編　ナカニシヤ出版，'98）

この本は人間科学という新しい領域（行動科学・心理学・文化人類学等から新しく発展しつつある科学分野）の研究法を纏めたハンドブックであるが，「人間科学」の文字を小さく印刷してあるように，「研究法ハンドブック」と称して差し支えない本である．調査の方法（「データの収集」「メッセージ分析」「観察法」「フィールド研究におけるインタビュー」他）も参考になるが，本学の学生には，「研究とは何か」「文献調査の方法」「研究論文の書き方」の章がとりわけ詳細に示されており役に立つであろう．インターネット利用法や欧米文献の紹介の仕方・記述の仕方に至るまで説かれてある．本稿でテーマにしている探索法や論文の書き方について日本の大学で授業科目として設けられていない現状では，『学術論文の技法』（斎藤孝著　日本エディタースクール出版部）とともにこの本の有効性はいうまでもない．

2. 『文献を探すための本』（斎藤孝他著　日本エディタースクール出版部，'89

年).

本稿でとりあげてきたことと同様なことをより体系的に概括的に説いた本．惜しまれるのはもっと詳細でも良かったと思われる．第7章「欧文の文献の探し方」の章は外国書を読み専門的に研究を進めようとする方に便利である．『文科系学生のための文献調査ガイド』（池田祥子　青弓社，'95――国会図書館員の手になる――）とともに一読を勧める．

3. 『世界を学ぶブックガイド――世界地域研究基本文献目録――』（池田修監修　嵯峨野書院，'94）

これは大阪外国語大学「世界地域研究基本文献目録」委員会が，世界各国別（及び地理・言語・比較文化論・国際関係）に言語・文学・社会の三分野について数10点ずつの基本文献を掲げたもので，文献目録があるものはそれも紹介している．各国の基本図書が一望でき，外国や地域研究に関心のある方には座右の書となる．平凡社からでている「○○を知る事典」（百科事典から抽出編集し直したもの）や講談社からでている各国別ハンドブックなども概観するのに有意義であるが，それぞれの国の入門書を繙くことなくただちに高度な書を知ることができる便利な目録である．ついでに世界思想社からでている「○○学を学ぶ人のために」シリーズは図書館に全部揃えてある筈である．『情報探索ガイドブック』，『チャート式情報・文献アクセスガイド』については上述した．

3　辞書・事典

基礎的な英仏独露中日各国語辞典に関しては毎年4月新入生に配布される『国立学報』の辞書紹介欄及びそのバックナンバー（旧名『小平学報』紙）をまず参照されたい．次に図書館参考コーナーが役に立つだろう．もっと専門的に或いはこれら以外の他の辞書については語学教官及び語学研究室（磯野研究館1階）に尋ねるのもよいが，ここでは参考図書から知る方法を記したい．第一に上記『国立学報』の'99年より'01年迄の英語の辞書についての滝沢正彦先生の一文を挙げておく．ことのついでに英語辞書については単独のものとしては永島大典『英米の辞書――歴史と現状』（研究社，'74）・加島祥造『英語の辞書の話』正・新

(講談社, '76年・'83年)・外山滋比古『英語辞書の使い方』(岩波ジュニア新書, '83)・笠島準一『英語辞典を使いこなす』(講談社学術文庫)等がある. 後二者は新刊書店でも買える.

先に紹介した『世界を学ぶブックガイド』(大阪外大編　嵯峨野書院, '94)は外国別に一覧表が掲げられてあるので便利で情報としても新しい. 少し前('92刊)になるが竹林滋他編『世界の辞書』(研究社)は30ヶ国あまりの国々の辞書並びにエスキモー・古代教会スラブ語の辞書迄とりあげ, その歴史や意義・それぞれの国の辞書観の違い等にも言及している詳細な紹介書で辞書の文化的意義・辞書のあり方・各国の言語・言語状況をも知りうる論文集の如き紹介書である.

次に小林英夫編『私の辞書』(丸善, '73)は30年も前の紹介書であるが専門的な辞書について詳しく言及してある. ケルト語・ゲール語(ともに同じ言語であるが後者はスコットランド中心)と区分して紹介, 同じようにヒンディ語・ベンガル語・ウルドゥ語をそれぞれとりあげる程で, アイヌ語やバスク語のような少数民族の辞書についても立項している. これらは丸善刊の雑誌『学燈』に129編連載された記事の内47回分を所載したものなので, 同誌1965年2月号(第62巻第2号)より1973年6月(第70巻第6号)を更に辿り直すとよい. この本の冒頭は碩学吉川幸次郎が「あまり字引きを引かない男である. というよりも, むしろ引きたがらない. したがって私の辞書というべきものを, 実はもたない. 本庄さん(編集者)の問いに答える資格をもたないのである.」という鬼面人を驚かす発言からはじまる文章で始まる人を食った文章であり本であるが, 鴻儒の発言もそれはそれで興味深い一文となっており, 他の大家の紹介も微に入り細を穿つ紹介集である. 収載内容が古い時期の辞書に亘り専門的なものも多いので初学者には不向きであるかも知れないが, 学問の深奥を知らしめてくれる点でむしろ現代人に適しているかもしれない.

この二書と対照的な, 近年刊行の気軽に見られるものを二冊あげておく. 室伏哲郎『この辞書・事典が面白い』(トラベル・ジャーナル社, '99)は分野別にランクづけしたもので経済学辞典や電子辞書まで多彩なジャンルが紹介されている案内書である. 佐野真『辞典事典字典ベスト255ガイド』(講談社α文庫, '00)

は'93年刊の単行本を改題して手軽に入手できるようになったもので，2章で紹介した『文献を探すための本』と同じ著者の紹介書．机上の辞書類もはやりのデータベースの一つなのであると喝破し，その便利さを分りやすく案内してくれる本．一点一点の紹介の重みには欠けるが，著者が参考文献の碩学であることには留意したい．普及啓蒙の一念からの案内書．

そうした碩学の一人に惣郷正明がいる．朝倉治彦（元国会図書館員で江戸学の碩儒でもある）とともに編んだ『辞書解題辞典』（東京堂，'77）は明治以来の辞書・事典の詳細な解説辞典で，沖森卓也他編『日本辞書辞典』（おうふう，'96，国語・国文学の辞書の紹介が中心であるが，他分野の辞書の一覧も載る）とともに，日本の近代の辞書・事典の大半を一望できる辞典の辞典である．百科辞典では詳細を知るには限界があるのであるから，これらをガイドに専門の辞書・事典に手を伸ばしたい．後者は辞典（ことばてん）の事典であり，前者は辞典・事典（ことてん）の事典であるが，それぞれの出版時点までの代表的な検索書である．他に『辞典の辞典』（佃実夫他編　文和書房，'75，辞典360点類書837点名を挙げる）や『事典の小百科』（紀田順一郎他編　大修館，'88）と称する検索書もある．後者は，大修館発行の月刊研究雑誌『言語』――昨年5月に発刊30年を記念し「日本の言語学」特集号が出た．CD-ROM付きで，欧米書含む重要文献解題及び『言語』誌30年368冊の総目録が掲載されている．こういう雑誌の総目録というのも重要な検索書の一つである．『世界』『思想』『一橋論叢』『史学雑誌』等主な雑誌の100号とか10年とかの刻み目に総目録又は総索引の特別号がでるから，留意しておきたい．『ジュリスト』誌は昨年2月刊の第1217号誌で1101号～1200号の内容総索引を載せている．こういう特集号はこれ一つで100誌揃えた気にさえなりデータベースの一つとして書架に備えておくとよい．筆者は二年後に完結する丸山真男集全16巻（岩波書店）・漱石全集全37巻（岩波書店）の総索引を今から鶴首している．例えば，柳田国男の新しい全集が刊行されているが，前の『定本柳田国男集』の総索引一冊持っていることでこの厖大な業績集を事典化していることになる意味をもつからである．『佩文韻府』という漢詩の索引を利用すれば清代以前の漢詩をたちまちに知ることができ，『国歌大観』という和歌の

索引を用いれば5音又は7音の片言隻句から和歌一首あるいは類歌や本歌まで検することが可能である．——誌の1984年1月号「辞書のたのしみ」及び1985年4月号「辞書への招待」特集[4]を再編集した事典の事典である．前半には「鉄道の事典」「へびの事典」「賭博の事典」「ビートルズ事典」等趣味の事典の紹介もされているが後半では「皇室事典」「シェイクスピア事典」「アジアの事典」「中国の事典」「子どもの本の事典」「性語辞典」「外来語辞典」等についての詳細な解説が施されている．おしむらくは再編集により，「辞書のたのしみ」特集にあった「辞典の辞典」「チェコの匿名辞典」（政治の弾圧期に匿名で執筆した人物の本名・事績を知る人名事典）他が省かれていることである．この「辞典の辞典」に記された情報は重要で，ここから以下の書物を検索することが導き出せる．

『辞典・事典綜合目録』（昭36年以来不定期）は新本として入手可能な辞書類を分類して掲載する．更に参考図書を広く収めた『日本の参考図書　解説総覧』（日本図書館協会，'80）及び補遺版『日本の参考図書　四季版』）があり，社会科学・人文科学のみならず科学技術のハンドブック（という名の学術書にも目を留めよう．早川書房刊ハヤカワ文庫の『新・SFハンドブック』のような一般書もなかにはあるが，『日本語教育ハンドブック』（大修館，'90），『民俗調査ハンドブック』，『部落史研究ハンドブック』，『近世史ハンドブック』，『博物館学ハンドブック』というように学術研究上必携のものが多い．ことに理系では専門分野別に大部なものが沢山出ている．『情報通信技術ハンドブック』，『液晶デバイスハンドブック』の如くである．）を知ることができベンチャービジネスの立ち上げ時には覗く必要がでてこよう．

外国でもこの種の辞典の辞典は種々でている．

'Gale' と略称される米国議会図書館蔵の辞書のリスト集：'Dictionaries and Other Word-related Books' (Detroit, Gale, '82) は数万点の辞書を紹介している．'Walford' と略称される 'Guide to Reference Material' (London, the Library Association) はイギリス中心のヨーロッパの参考図書の紹介書．'Sheehy' と略称される 'Guide to Reference Books (Chicago, ALA) はアメリカ中心の参考図書の紹介書で中心は辞典の紹介．'A Bibliography of

Slavic Dictionaries'（Bologna, Instituto Informatico Italiano）というイタリアで編集出版されたスラブ各国語の辞典類紹介書もある．

英文の辞典ではR.L. Collison編 'Dictionaries of English and Foreign Languages'（New York, Hafner '71）が有名という．筆者の手元には 'A Guide to Foreign Language Courses and Dictionaries'（London, the Library Association）という英国図書館協議会刊の辞書の辞書があり，JAPANESEの章を引くとイギリス版は元より講談社インターナショナル刊他の英語版の辞書の他『大漢和辞典』や『日本国語辞典』迄紹介されている．この後者二書は図書館参考コーナーで是非一度手にとってみておくとよい．こうした大部な辞書（『国立学報』でも紹介済み）があることを日本人も留学生も大学生として知っておいて欲しい．以上の辞典の辞典の項の紹介は長沢雅男氏によるので当然『情報と文献の探索』でも詳しく紹介されている．この他『辞典・事典全情報45／89』『同90／97』及び年刊参考図書解説目録シリーズ（いずれも日外）にも日本で刊行された辞典・事典名が網羅されている．

これらの辞典の辞典もしくは事典の事典・辞書の索引というべき書を，暇な折にめくってウィンドショッピングをしておくといざという時に思わぬ益を齎す幸運に接しえよう．それも教養の一つではないだろうか．他人より多くの情報源を持ちアンテナを張り巡らしておかなければいけない今日なら尚のこと，日々の地味な遊びを兼ねた積み重ねが肝腎なのではないだろうか．果報は寝て待つのではなく練って待つものなのだそうである．

4　新しい情報

もっと新しい情報はどう手に入れるか．

国会図書館『日本全国書誌』・同週刊版，日本書籍出版協会刊『日本書籍総目録』・同『これから出る本』が新刊本の主な情報源になる．前者は図書館で後者は書店で利用できるであろう．更に，トーハン（e-hon），日販（本やタウン），丸善「本の図書館」や八重洲ブックセンター，セブン―イレブン書籍サイトも有用なインターネット情報源であろう．新聞広告（特に読書特集の下欄）や『図

書』(岩波書店)・『学燈』(丸善)・『本郷』(吉川弘文館)・『本の窓』(小学館)・『未来』(未来社)等のPR誌や,学会に入ると送られてくる専門書の出版社のパンフレット,書評新聞,専門雑誌の広告等も日頃研究者が目を走らせる源である.学習研究活動が進んでくれば,そうした行動は習慣化していくので第2章で分類した第2段階から第5段階a迄が日常茶飯事になるわけである.

それでも5-bはもう一つ上のレベルでコツや勘が必要になる.それも山を張る勘による行動では骨折り損が目に見えている.しかし餅は餅屋で尋ねていく先々に知恵者がいるもので,そうした奇特な尊い先人の導きでまた新たな展望が開けることがよくある.彼ら(生者である場合のみならず物故した先駆者である場合,又文献である場合,機関である場合もある)に遭遇するためにも可能性の高い所を尋ねることが前提である.上述した書物はそうしたものの一つである.図書館の参考コーナーや参考係を訪れれば,機関の情報が得られるであろう.例えば『全国特殊コレクション要覧』,『全国図書館案内』,『類縁機関名簿』,『専門情報機関総覧』,『歴史資料保存機関総覧』,『近世近代史料目録総覧』等がそれである.これらに頼って訪れた先々で又新たな智恵が授けられるであろう.

そうした情報の一つとして手元に用意するとよい一書がある.『TOKYO BOOK MAP』は新刊書店・古書店一覧だけでなく都内の特殊な図書館・資料館のガイドブックを兼ねたもので東京の面白さ奥深さに目を開かせてくれる.『全日本古本屋地図』もしくは『古書店地図帖』とともに座右に置きたい.東京にいてもそれと知らず,お茶の水の駅から明治大学前を下り楽器やスノーボードを買いに駿河台下交差点を左折する向きでも,右折して世界に冠たる古書店街の凄さを認識している者がどのぐらいいようか.

尚,外国でも,例えばイギリスでは'The Bookshops of London'や'Directory of Antiquarian & Secondhand Booksellers'というようなガイドブックが刊行されている.『キネマ旬報』「世界映画記録全集」特集('73.9刊)にはロンドン・パリの古書店の記事やフィルムライブラリーの紹介を載せている.

以上極めて雑駁に縷縷連ねたが,少しでもお役に立てば,これらの編著者の労が報われるであろう.創見や発明ばかりが高く評価されがちであるが,これらの

先人の労が必ずや報われねばならないのである.

註(1)　日本の古い事項の文献を探す主題書誌索引に『古事類苑』という優れたシリーズがある. たとえば「猫」がいつ頃から書物に表されているか, またどの文献に記事が載っているか知りたい時, この書を利用すると江戸時代までの主要な記事が抜粋して掲げられている. 一読して文化史的把握が可能な索引であり百科事典である. 同様なものに『広文庫』及びその索引である『群書索引』がある. 本学図書館の参考コーナーに設置されていて当然の書である.

註(2)　インターネットで本を探すためのガイドブックを二点紹介しておく.『徹底活用「オンライン読書」の挑戦』(津野海太郎他編 '00　晶文社) はオンライン図書館グーテンベルクや青空文庫の他, 日本・海外の研究機関・図書館・美術館の詳しいガイドブック・アドレス帳であり.『徹底活用「オンライン書店」の誘惑』(同上, '98) はアマゾン・コムを始め日本・海外の新刊書店・古書店のガイドブック・アドレス帳である.

註(3)　江戸及び東京の都市や歴史事項に関しての便利な文献索引がある.『江戸・東京学研究文献案内』(大串夏身, 青弓社, '91) 及び『江戸・東京学雑誌論文総覧』(同, '94) の二書は, 主題書誌索引の類で, 前者は図書の, 後者は研究論文の文献目録である. 前者には調査の方法とレファレンスブックが詳細に説かれていて, 一般的な研究方法としても検索方法が丁寧に説明されてあり, 前章で立項して記しても遜色のない優れた調査方法文献及び文献目録である.

註(4)『言語』誌 ('90.5 V19-5)「私の辞書活用法」は『事典の小百科』('88) に含まれていないが, 様々な辞書類とその活用法を開陳してくれている.「〝女性〟を探す」「正しい日本語を探す」「英語の語源を探す」「『辞書』のなかの『アシア』」「古い辞書・便覧を活用する」他. これも豊かな情報源であり, 専門家怖るべしとの感を抱かせる. 図書館の雑誌バックナンバーで一読されたい.

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)